

不登校児支援スクール

「ネバー・マインド」



私たちは、不登校の子や親に対して、「ネバー・マインド（気にしなくていい）！」と伝えています。

なぜならば、「人生は、どこからでもやり直せる」し、「不登校の経験は、決して無駄にならない」からです。

「人生は一冊の問題集」です。あなたは、今、「不登校の経験から学びを得る」という問題に挑戦しているのです。

必ず、あなたにも「不登校の経験があったからこそ、今の自分があるんだ」と思える瞬間は来ます。「朝の来ない夜はない」のです。

～目次～

○ワンポイントアドバイス

02 立ち直るきっかけは「信仰に目覚めた」こと

○ネバー・マインドについて

03 ネバー・マインドの活動紹介

○生徒体験談

06 真っ暗だった世界が、光り輝くとき(ザ・伝道 191号)

○保護者体験談

24 不登校を克服して夢の扉を開いたわが子(月刊誌 2009年10月号)

○ネバー・マインド高校生座談会

32 不登校を経験した子供たちの本音(アー・ユー・ハッピー2012年2～3月号)

○連絡先など

39 連絡先

ネバー・マインド富澤さんの不登校ワンポイントアドバイス

立ち直るきっかけは「信仰に目覚めた」こと

不登校の子どもを持つ親御さんが必ず悩むのが、「子どもとどう接していいのかわからない」ということです。なぜわからないかという、子どもが「親と違う考え方や感じ方、行動をする」からです。ただ、それは、「親子であっても魂は別々」であることを考えれば、当たり前のことなのです。ですから、子どもを独立した人格として尊重しながら対応策を考えないと、子どもも親も苦しくなってしまいます。

それでは、子どもを理解するにはどうしたらいいのでしょうか。それには、子どもの話をよく聴き、子どもの気持ちを理解しようとするのがいちばん大切です。子どもを決して裁かず、不登校になるまでの苦勞を労わる愛の思いで、子どもの気持ちを受け止めてあげるのは、気持ちを受け止めてもらい、「自分は理解された」と思えた子は、「自分は愛された」と感じ、その実感が前に進むエネルギーとなります。

その上で、フリースクールに行く、塾に行く、保健室登校から始めてみるなどの選択肢を提示してあげましょう。しかし、「どれを選ぶのか、いつ動き出すのかは、子ども自身が決める」というのが、いちばんい

いと思います。

もうひとつ、子どもが立ち直る大きなきっかけとなるのが、「信仰に目覚める」ことです。不登校児の多くは、必要以上に自分を責め、自信を失っています。「死にたい」と思っている子も多いです。そういう子どもたちに、ネバー・マインドでは、「あなたの魂をつくられた仏は、この瞬間も、あなたのことが大好きで、期待して、信じてくださっているんだよ」という仏の慈悲を、くり返し伝えています。なぜなら、人は、「自分が“仏の子”であって、尊い存在なんだ」という自覚を持つことで、強くなれるからです。ネバー・マインドで、夢や目標をつかみ、復帰していった子全員に共通しているのも、「信仰に目覚めたこと」です。

不登校は、決して、マイナスの経験ではありません。いま不登校に悩んでいる方も、どうか絶望せず、希望の種となる「信仰」と、子どもの個性を、もう一度見つめなおしてみてください。道は無限に広がっています。



幸福の科学宗教教育企画局 ネバー・マインド担当

富澤仁博さん

東京国際大学商学部卒業後、幸福の科学に奉職。2006年より現職。子どもたちからは「とみさん」のニックネームで親しまれている。趣味は旅行。一男の父。

2012年3月号「アー・ユー・ハッピー？」より

ネバー・マインドとは

～不登校児と親が、自信を取り戻し、幸福な人生を歩むための支援活動～

『ネバー・マインド』は、宗教法人・幸福の科学による、不登校児支援スクールです。スクール名でもある“Never mind”(気にしなくていいんだよ)の精神で、子どもたちの



個性・価値観・自主性を尊重しながら、友人づくり、体力づくり、学習支援、信仰教育を行っています。また、子供のみならず、家族へのサポートを通して、親子の信頼関係が深まる、愛と調和に満ちた家庭作りの支援を行っています。当活動は、専属の職員とボランティアによる、専門知識と経験を持つ者のサポートによって運営されています。

参加対象

参加対象は、不登校の小・中・高校生です。

現時点では、東京(品川区戸越)のスクールに通える生徒を募集しています。

遠方の方への支援は、電話相談などを行っていますので、お気軽にお問い合わせ下さい。

学校との連携

学校と十分な連携・協力関係を保ち、再登校や進学を支援しています。

他のフリースクールと同様、多数の学校からは、当スクールに出席した日数を「出席扱い」と認められ、また、「通学定期」の許可をいただいています。

ネバー・マインドの特徴

1. 自信を取り戻すための信仰教育

当スクールでは、不安や悩みを抱える不登校児に対して、“Never Mind(気にしなくていい)”と伝えています。なぜならば、仏神の愛や期待を感じることで、自信を取り戻す一歩だからです。信仰教育では、様々な苦難困難を克服してこられた体験談と経典の紹介、御法話拝聴、祈願、法談を通して、自信や夢を取り戻すための支援を行っています。

2. 休学中の学業支援

個別指導形式で、勉強の遅れを取り戻す支援を行っています。不登校の子の多くは、学力が足りないために不登校になっていることもあるため、分からないところまで戻って取り組んでいます。

3. スポーツ・イベントの企画

公園での遊びやスポーツ、合宿、社会科見学、誕生日会やクリスマス会など、様々な楽しい企画を開催しています。

4. 友人づくり、各種サークルづくり

生徒に聞くと、同じ悩みを持つ仲間同士が語り合えることが、ネバー・マインドの最大の魅力です。ネバー・マインドは、大切な仲間がいる居場所です。

祈願について

月に一度、祈願祭を開催しております。不登校を克服するための、克己心、向上心を高めるためにも、祈願をおすすめしております。幸福の科学の祈願は、神々の主である、



エル・カンターレから直々に賜った、大変尊いものです。

1日の流れ



10:00～11:00 自由交流
11:00～12:00 漢検&英検対策(希望者)



12:00～13:00
昼食 (各自持参)



13:00～15:00
信仰教育&勉強(個別)



15:00～16:00
屋外での運動



16:00～16:30
おやつ



16:30～18:00
自由交流

入塾までの流れ

一度、見学(予約)に来られて、「生徒本人が、通いたい」と思うことが、入塾条件です。また、幸福の科学の信者でなくても構いません。○電話やメールでの問い合わせ → ○面談 → ○見学&1日体験 → ○本人が入塾するかを決める → ○週1～3回の通学(本人のペースで参加) → ○祈願祭(毎月月初)に参加。

真っ暗だった世界が、 光り輝くとき

ユニバーサル・スタジオ・ハリウッドで。



2012年春、ネバー・マインドの仲間と行った「チャレンジ!! アメリカ横断合宿」での1枚。

まつながたいしゅう
松永大周くん・東京都（右から2人目）

小学校・中学校でいじめを受けた松永大周くんは、高校入学直後、ついに不登校に。絶望の淵から彼を救ったのは、幸福の科学の不登校児支援スクール「ネバー・マインド」でした。松永くんがネバー・マインドを通して信仰に目覚め、人生に希望を見出すまでの体験をお伝えします。

[ザ・体験] いじめ、不登校、克服。



幼稚園時代。

誰にも言えない

一九九三年、青森県で生まれた僕は、東京の下町・墨田区で育ちました。

体が弱く内気な性格だったため、僕は幼稚園のときからいじめを受けるようになりました。いじめが本格化したのは、小学校四年生のころのことです。

不良グループのリーダー・S くん目につけられた僕は、むりやり彼のグループに入れられました。

「大周！ あいつ気に入らないから、殴ってこい！」

S君は、いつも僕に理不尽な命令をってきます。

もちろん、人を殴ったりはしませんでしたが、彼の命令に背くと、暴力をふるわれることもあったので、僕はいつもビクビクしていました。

そんな僕を見て、他のみんなも、「あいつは弱い」と思ったのか、僕は、いじめのターゲットにされるようになったのです。

「おい！ “体臭”！ おまえ、臭いぞ！ 近寄るな！」

言葉によるいじめはほとんど毎日。ときには数人に取り押さえられて殴られたり、ランドセルをトイレに投げ込まれたり――。

学校でいじめられていることは、両親にも先生にも言えま



大周君の自宅近くの川。独りで座ってボーっとしていた。

せんでした。三つ下の弟がいじめにあったとき、母がショックで倒れてしまったからです。

（お母さんを、絶対に悲しませたくない……）

僕は、学校で殴られて怪我をして帰ると、「〇〇くんと遊んでて、転んじゃったよ」などと嘘を言い、家ではいつも弟とふざけ合い、「明るいおぼかキャラ」を演じ続けていたのです。

前髪で顔を隠して

いじめを隠し通していたために、僕は、いやでも学校に行くしかありませんでした。

勉強は大の苦手。いじめに

よるストレスもあって、授業中はいつもボーッとしていました。

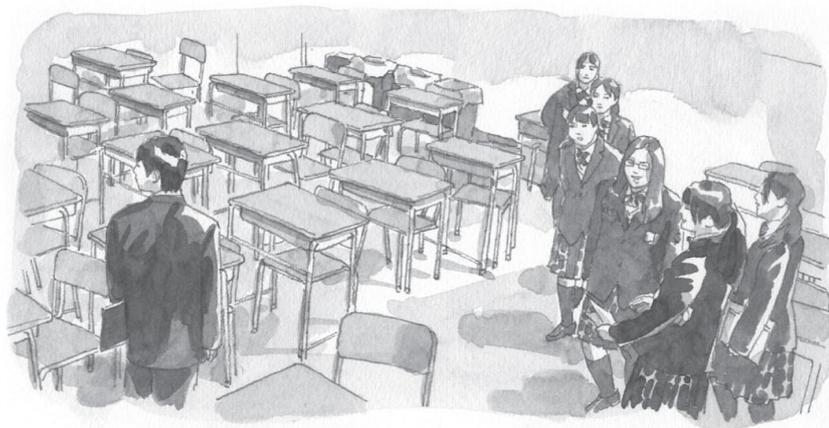
当然、成績はオール1に近い最悪の状態でした。

Sくんや他の何人かからのいじめは、六年生までずっと続き、僕は、ますます内にこもるようになってしまったのです。

人と目を合わせるのが怖くて、前髪を長く伸ばし、顔を隠して、見た目もどんだん暗くなっていきました。

そんな僕にとっての唯一の楽しみは、大好きなガンダムゲームをすること。

家族と過ごす時間と、家でゲームをする時間だけは、誰からも害されない心安らぐ時間で



中学生のころ。女子のグループからも悪口を言われていた。

した。
こうして僕の灰色はいいろの小学校時代は、ただ、ただ、虚しく過ぎ去っていったのです。

中学でもいじめに

僕は、Sくんが進学する中学校を調べ、彼とは違う地元ちがの中学校に進学しました。

(やっと彼と離はなれられた！
でも、もう、いじめはごめんだ)
僕は、二度といじめられられないように、できるだけ無口でいようと決めました。

しかし、それがかえって災わざわいしました。僕は次第にクラスのなかで浮ういていき、「お前の顔、

キモいな」などと、言葉の暴力を受けるようになったのです。

また、クラスメートから僕の携帯けいたいに、「あいつ、ウザくない？」というメールが回ってきたことがあり、僕が「そうは思わない」と返信すると、呼よび出されて殴られました。

女子の六、七人のグループにも、ターゲットにされました。

「大周おほしゅうって、何でしゃべんないの？ キモいよね。」

「大周おほしゅうが触さわったところ、ちゃんと拭ふいてよ。汚きたいから！」
そんな悪口を言われました。

いじめは日常的に続き、僕は、だんだん対人恐怖たいにんこふがひどくなり、たまに誰かに話しかけられ



ネバーに通い始めたころ。
顔を隠すように前髪を伸ばして。

でも、「はい」か「いいえ」しか
答えられなくなってしまうので
です。

あまりにも学校がつらく、仮
病を使って早退し、家でゲーム
をしたり、独りで川へ行つてポ
ーツと座^{すわ}っていたり。

テレビドラマなどで、楽しい
学校生活のシーンを見ると、と
ても落ち込みました。

(いいなあ……。本当は僕も、
みんなと楽しく話したり、騒^{さわ}い
だりしたい……)

勉強も運動もだめ。性格も
暗く、人とふつうに話すことす
らできない――。

心を開いて話せる友達もな
く、僕は、たった独りで耐^たえる

しかありませんでした。

ついに不登校に

夢も希望もないまま、一応、
高校に進学はしたものの、同じ
クラスに態度が悪い生徒がい
るのを見て、(だめだ！ また、
いじめられる！)と、恐怖心で
いっぱいになりました。

(無理だ。行きたくない！)
結局、入学後一週間足らずで、
僕は、不登校になってしまっ
たのです。

しかし、家にいても、何もす
る気力が起きません。大好き
なゲームすら、やる気になれな
いのです。

[ザ・体験] いじめ、不登校、克服。



ネバー・マインドの入り口。「ようこそ、ネバー・マインドへ！」

生きているようで、死んでいる、そんな感覚でした。

(僕は、このまま引きこもって、ニートになってしまおうのだろうか……。落ちるところまで落ちていくんだろうか……。) 将来への不安で、胸が押しつぶされそうになりました。

初めて 「ネバー・マインド」へ

心配した母は、母が信仰している幸福の科学の支部長に相談に行きました。

「幸福の科学に、『ネバー・マインド』っていう不登校の子を支援するスクールがあるんだ

って。行ってみる？」

幼いころ、母に連れられて、支部や講演会に行ったことはありましたが、幸福の科学については、あまり詳しくは知りませんでした。

けれど、(さすがにこのままじゃまずい)と思っていた僕は、母といっしょに見学に行ってみることにしたのです。

二〇〇九年五月。その日は、よく晴れていました。

母の後について、おそるおそる部屋に入っていくと……。

ネバー・マインドの室内には、太陽の光が差し込んで、とても明るく見えました。



富澤さん(右から2人目)を中心に、和気あいあいと。

数人の生徒が、和気あいあいとカードで遊んだり、話をしたりして、くつろいでいます。

「こんにちは。富澤です」

笑顔であいさつしてくれたその人は、ネバー・マインドのスタッフ、富澤仁博さんでした。

「ネバー・マインドっていうのは、『気にしなくていいよ』っていう意味なんだ。大川隆法総裁先生、主エル・カンターレは、不登校でも、気にしなくて大丈夫だよって、ネバー(ネバー・マインドの略称)を与えてくださったんだよ」

各部屋を案内しながら、富澤さんはそう説明してくれました。

この日は一言も話せませんでした。この日は一言も話せませんでした。したが、ネバーの平和で安らいだ雰囲気、僕にはとても心地良く、(ここなら大丈夫かもしれない)と思っていました。

ネバーを後にすると、母がさっそく訊いてきました。

「どうだった？」

「僕、あそこに通ってみるよ」

「そう、よかった」

母の安心した笑顔を見て、僕もホッとしました。

仲間の優しさにふれて

以来、火・木・土の週三回、僕はネバー・マインドに通うことになりました。

[ザ・体験] いじめ、不登校、克服。



ネバーには、小学生から高校生まで七、八人の生徒が通って来ていました。

暴力的なものでなければ、ゲームも持ち込み可能。「自分を高める時間」には、各自、勉強をしますが、読書をすることもできます。

夕方になると、ボランティアの人たちが、おにぎりやみそ汁を手作りしてくれて、みんなでテーブルを囲んで食べました。

僕は、あたたかくアットホームなネバーでは、ほどなく他のみんなとも、ふつうに話せるようになりました。

けれど、僕の口をついて出るのは、過去の不幸な体験ばかり。

みんなは、「それはつらかったね」と、親身きみになって聴いてくれました。涙なみだを流して聴いてくれる子もいました。

(こんなに優しい子たちがいたなんて……。やっぱり信仰を持っているからなのかな……)

幸福の科学の信仰を持つと、まず、「与える愛」が大切だと学びます。見返りを求めずに、他の人に愛を与えよう、優しくしようという教えです。

ネバーのみんなは、心から「与える愛」を実践していたのです。

僕は、たった独りで抱かかえ込んでいた心の苦しみを、初めてほかの誰かと共有うれできた嬉しさをいっばいになりました。



独りで膝を抱えていた山田光流くん。

それに、富澤さんは、いつも僕のことを褒めてくれました。

「君は、気遣いができて、素晴らしいね」

「本当に君は優しいよね」

すべてに自信がなかった僕にとって、富澤さんの心からの言葉は、どれほど励みになったことでしょうか。

数週間もすると、僕の閉ざされた心は、少しずつ少しずつ解けていきました。

かけがえのない友達

ネバーに來ている生徒のなかで、一人だけ、とても不思議な子がいました。

誰とも話さず部屋の片隅で「体育座り」をして、ずっと膝に顔をうずめているのです。

僕と同一年の山田光流くんでした。

光流くんとは家が近く、帰りはいつもいっしょになりました。携帯アドレスの交換はしたものの、話しかけようとする、光流くんはサッとイヤホンをしてしまいます。

お互い、もともとコミュニケーションが大の苦手。なかなか話すきっかけがつかめません。

そんなある日のこと。ネバーからの帰りの地下鉄で、何気なく光流くんの見えていた画像に目をやると――。



ガンダムのアニメでした。
僕は、光流くんの肩をポンと叩いて言いました。

「ガンダム、見てるんだ。僕もずっとガンダム見てるよ」

「そうなんだ。どれを見た？」

「全部」

「僕も、全部見た」

光流くんが、初めて心の鍵を開けてくれた瞬間でした。

その日、光流くんと別れたあと、僕は彼にメールしました。

「もっとお互いのことを話そう」

僕たちは、学校でのつらい体験を暴露し合いました。

女子のグループに悪口を言

われてつらかったこと、顔がキモいとぼかにされ、とても傷ついたこと……。

光流くんも、ある女子に嫌われて、その女子のグループを敵に回してしまい、クラスのなかで孤立してしまったことなどを話してくれました。

「僕たち、似ているよね」

やがて光流くんは、僕にとって、かけがえのない宝物のような存在となっていたのです。

明るい自分を
心に描こう

ネバーでは、毎回必ず「信仰教育」の時間がありました。



幸福の科学の信仰について
学び、みんなで話し合うのです。

「人間はみな、『仏の子』。素晴らしい存在なんだよ。不登校になったからって、だめな人間っていうわけじゃない。いろいろな苦労を経験したみんなは、それだけ多くの学びを得られるのだから、むしろ『魂のエリート』なんだよ」

富澤さんは、いつも僕らをそう励ましてくれました。

また、「主エル・カンターレは、苦しいときや悲しいときも、いつも、みんなを見守ってくださいっている。主は、どんな人をも愛し、そして決して見捨てないんだ」、とも教えてくれました。

（こんな僕でも、主は愛してくださいっているのかな……）

正直言って、当時の僕は、主に愛されているという実感は持てませんでした。

富澤さんから勧められた『「幸福になれない」症候群』と※ぶつ ぼうしんりいう仏法真理の経典には、次のように書かれていました。

「みじめな自己像をいくら見つけても、よくなることは決してありません。考え方の根本を変えて、自己イメージを輝かせることが大切です」

（確かにそのとおりだ……）

主にも、みんなにも愛される資格などない、孤独で何のとりえもないだめ人間……。それ

※仏法真理：主エル・カンターレが説かれる、人類普遍の教え。大宇宙を貫く法則のこと。

[ザ・体験] いじめ、不登校、克服。



幸福の科学学園那須本校のパンフレット。

が僕の自己イメージでした。

そんなネガティブな自己イメージを、僕は、明るく積極的なイメージへ変えていこうと決意しました。

幸福の科学学園受験

ネバーに通い始めて、約二カ月がたったある日のこと。

富澤さんが、翌二〇一〇年春に開校予定だという「幸福の科学学園」のパンフレットを見せてくれました。

栃木県とちぎけんの那須なすの広大な自然のなかに、男女共学、全寮制ぜんりょうせいの中高一貫校いっかんがつくられるというのです。

(幸福の科学の学校ができるなんてすごいな！ 同じ信仰を

持つ子ばかりだから、いじめもないし、楽しそうだなあ……)

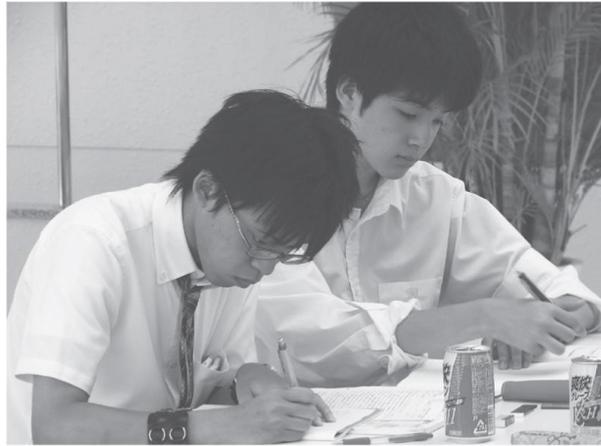
僕の胸は高鳴りました。

けれど、もう一度、高校受験をやり直すにしても、小学校・中学校とほとんど勉強していない僕には、ハードルが高すぎます。

母に相談すると、「目標を持って頑張るのはいいことだから、チャレンジしてみたら？」

そう言ってくれました。

ネバーの中学三年生の女子二人、それに光流くんも学園受験を希望していると知り、僕も



幸福の科学学園受験に向けて猛勉強する大周君と光流君。

受験を決意しました。光流くんも僕も、一年留年しての受験です。もちろん、富澤さんも応援してくれました。

「四人で、頑張っていこう！」

夏休みには、富澤さんが勧めてくれた英語教材を使って、中学の英語を一通りやりきると、ほとんど何も分からなかった英語が、どんどん分かるようになって、成績も伸びました。

（僕でもやればできる！）

それは、僕にとって、大きな自信となりました。

ときには四人のなかで一番学力のある光流くんが先生役となり、僕たち四人は、幸福の科学学園受験に向かって猛勉強

強を続けていきました。

信仰を語り合える 「法友」として

初めて持てた目標、共に励まし合える仲間の存在——。

僕は、日に日に心が明るく元気になるのを感じていました。

けれども、過去のトラウマからか、ときどき、仲間を疑う気持ちちがわいてきます。

（ネバーのみんなも、本当は僕のこと暗いと思っているんじゃないのかな……？）

メールをしても、すぐに返信がないと、（やっぱり嫌われるんだ）と、不安になります。

[ザ・体験] いじめ、不登校、克服。



幸福の科学学園那須本校。

光流くんも、「ネバーの女子からあいさつされると、どう返していいか分からない。やっぱり女子は信じられない……」と、僕に相談してきました。

「僕も同じだよ。でも、お互い、もっと仏法真理を真剣しんけんに学んで、心から主を信じ、人を信じられる僕らになっていこうよ」

最初は「傷のなめ合い」のようにも見えた僕たちの関係は、やがて信仰を語り合える「法友※」へと変わっていったのです。

世界が輝いて見えた

年が明けて、二〇一〇年一月。いよいよ受験本番です。

僕なりに全力を尽くしたものの、結果は不合格。結局、四人のなかで、光流くんだけが合格しました。

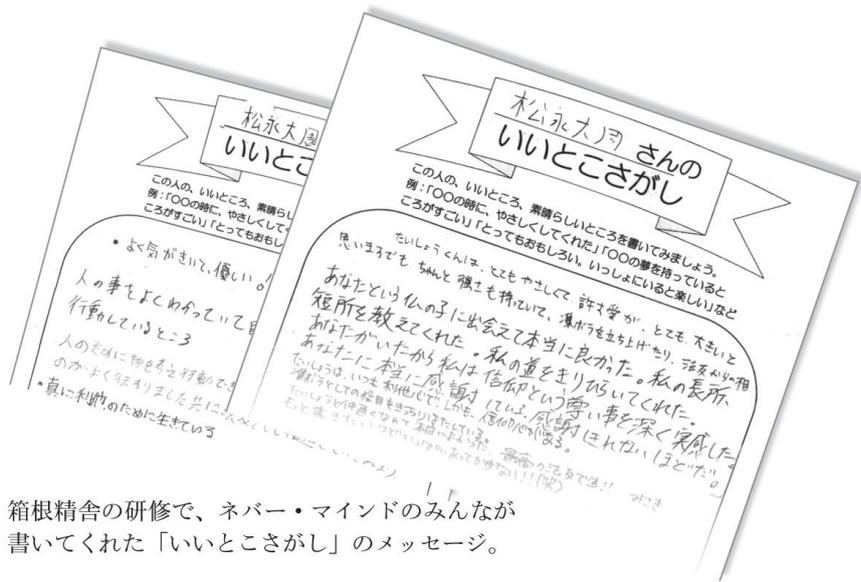
「おめでとう！ 光流くんは、努力も実力も、ズバ抜けていたもんね」

みんな光流くんの合格を、心から祝福しました。

そして、受験後の三月。ネバー・マインドのみんなと、幸福の科学の「箱根精舎しょうじや」で二泊三日の研修を受けたときのこと。

研修のなかで、「○○さんのいいとこさがし」という企画きかくがありました。配られた用紙に、一人ひとりの良いところを見つけて書き込んでいくのです。

※法友：主エル・カンターレを信じ、ともに仏法真理を学ぶ仲間のこと。



箱根精舎の研修で、ネバー・マインドのみんなが書いてくれた「いろいろ」のメッセージ。

「大周くんは、自分のことより人を思って行動しているところが素晴らしい」

「いつも優しく、悩みごとなどを真剣に聴いてくれる」

「正しいことをはっきり言えるところがすごい！ 君はリーダーの素質あるよ！」

みんなは、僕の長所を、そんなふうに書いてくれました。

（僕のこと、こんなに良く思ってくれていたなんて……）

嬉しくて、心があたたかくなり、涙があふれました。

（そういえば、光流くんも、「大周と話していると心が落ち着くよ。カウンセラーとか向いてるんじゃないの?」と言ってくれたっけ……）

僕は、いつのまにかネバーのなかで、悩み相談役のような存在になっていたのです。

（僕を変えてくれたのは、信仰と仏法真理の力だ。この体験を話すことで、多くの人を幸せにできる。こんな僕でも人のお役に立ってるんだ!）

研修の最後に、「気づき」を発表する時間がありました。

「誰か、発表したい人？」

富澤さんの問いかけに、僕は真っ先に手を挙げました。

「僕は、将来、カウンセラーになって、僕のようにいじめや不登校に悩む子の話を聴いてあげ、助けてあげたいです」

〔ザ・体験〕いじめ、不登校、克服。



箱根精舎の研修で発表する大周君。

拍手がわき起こりました。

このとき僕は、生まれて初めて、将来の夢をはっきりと心に描くことができたのです。

その翌日から、世界がまったく違って見えました。明るく輝いて見えました。

うす曇りの暗く寒い冬景色が、明るい太陽が輝く春の景色に変わったように感じたのです。

僕が伝えたいこと

現在、僕は、通信制高校の二年生。大学進学を目指して勉強しながら、ネバー・マインドの高校生ボランティアとして活動しています。

その合間に、幸福の科学の精舎に行って経典を開き、※ 仏言をノートに書き出し勉強しています。昔では考えられないほど充実した毎日です。

経典『信仰のすすめ』に説かれている、「泥中の花」は、僕の大好きな教えです。

「蓮の花は、汚い泥沼からスーッと美しい花を咲かせる。この世は、苦しいことや悲しいことに満ちているかもしれないけれど、たとえどのような環境にあらうとも、それを言い訳にせず、泥沼に咲く蓮のように、美しい花を咲かせなさい。光り輝く存在となりなさい」
僕の過去は、泥沼のように、

※仏言：仏の言葉。幸福の科学では、大川隆法総裁先生が説かれる教え・言葉のこと。



2012年春の、ネバー・マインドのアメリカ横断合宿での一枚。

つらく苦しいものでした。すべての自信を失った僕は、心が病んでいました。

そんな僕が、どん底から立ち直れたのは、富澤さんやネバーのみんなから、たくさんの愛をもらったからです。

ネバーを通して信仰に出会い、「魂の親、主エル・カンターレに愛されていた」と、気づくことができたからです。

学校では、まったく活躍の場がなかった僕。

でも、主は、そんな僕をも決して見捨てることなく、ネバー・マインドという活躍の場を与えてくださったのです。

僕が、今、伝えたいこと。そ

れは、「主エル・カンターレは、すべての人を、いつも見守り愛している」ということです。

いじめや不登校に苦しんでいる子供たちは、本当につらく、そして孤独だと思っています。

僕は、そういう子供たちみんなの力になれるような人間になりたい。心からそう願っています。

そのためにも、さらなる自己変革をして、もっと明るく、もっとさわやかで、もっともっと強い自分をつくっていききたい。

そして、苦しんでいるみんなに伝えたい。

「大丈夫、君は一人じゃないよ」と。

[ザ・体験] いじめ、不登校、克服。



墨田区の自宅近くで、母・由佳子さんと。「小学生のころ、外に遊びに行ってもすぐに帰ってくるので、『おかしいな』と思ったことはありました。でも、まさか*いじめ*られていたなんて……。大周は、弱い子なのかと思っていましたが、一人で耐えていたのですから、本当は強い子なのだと思います。ネバー・マインドには、心から感謝しています」（由佳子さん談）。

め合える大切な存在です。
がっていて、いつも互いを高
た。離れていても、心はつな
われる存在になっていまし
いつしかネバーの皆から慕
葉が消え、明るく愛にあふれ、
を語ってから。マイナスの言
変わったのは箱根の研修で夢
ムをしました。彼が大きく
した。似たところがある僕と
は気が合い、よく一緒にゲー



大周君は、ネバ
ーに来たころ
は暗く悲観的で

「大周は、互いに高め合え
る大切な友達です」

幸福の科学学園高校二年生

山田光流くん

仏との絆を知り、魂の輝きを取り戻す！

特集3

不登校を克服して 夢の扉を開いたわが子

夫の転勤によって、新しい地に赴いた須山美紀代さんは、大きな問題にぶつかります。「学校が大好き」と言っていた息子の突然の不登校。信仰によって、家族の絆を強く結び、問題を解決した体験を紹介します。

須山 美紀代さん
(41歳・札幌市・主婦)

義父・信次さん

長女・菜津美さん

夫・幸政さん

長男・大輝さん

「学校に行きたくない……」

「お母さん、お腹が痛いから学校休んでもいい？」

いつも元気いっぱいの息子の様子がおかしいことに気付いたのは、引越して間もない頃のことでした。

私たち家族は、主人の仕事の関係で2006年に、北海道から埼玉県に引越しました。新学期に合わせて転校した長男の大輝は、当時13歳。

体の不調を訴える日が続き、大輝はついに、「学校に行きたくない」と言い出すようになったのです。

（昨日の夜までは、あんなに元気に学校に行く支度をしていたのに……）

理由を訊ねてみると、担任の女性がひどい言葉遣いで、ヒステリックに怒鳴るとい



活発な性格で、埼玉に引越す前は、休みの日も登校したがるほど、中学校が大好きだったという大輝さん。

うのです。

私は、「大輝、学校にはちゃんと行かなきゃいけないよ」と背中を押し続けました。

その言葉に、息子も懸命に、体を引きずるようにして玄関に向かいます。しかし、いざ外に出ようとすると、体が震え出し、時には過呼吸の発作を起こすこともありました。

そうして休みがちになった息子が、やつとの思いで登校した日も、担任は、「みんな普通に通っているのに、何でお前だけ通えないんだ!! 郷に入れば郷に従え!」と、責め立てました。さらに、「お前は名前負けしているな」とまで言い始めたのです。

（今までは、「何で学校に行けないの」って、大輝ばかり責めていたけれど、この先生、ちょっとおかしいかもしれない……）
私はそれまで強く自己主張もせず、周り

の人に意見を合わせて生きてきました。

(でも、息子が苦しんでいるときに、味方になってやれるのは私しかない！)

私は勇気をふりしぼって、何度も学校に通い、直接担任と話をしましたが、埒が明きません。反対に、「あなたみたいなのは保護者は初めてです!!」と、逆切れされる始末。

私もついつい感情的になって、怒鳴り返してしまうこともありました。

息子は次第に気力を失い、一学期の終わりには、ついに不登校に。それでも息子は、毎朝、学校に行くのと同じ時間に起き、家族のために洗濯などの家事を手伝い、「せめて自分ができることを何かしよう」と一生懸命でした。

(大輝はがんばって学校に行こうとしているのに、どうしてこんなことに……)

登校する大輝さんと距離を置きながら、学校まで付き添った美紀代さん。うつむいて歩く後ろ姿を見守ることしかできず、(あんなに元気いっぱいだったのに……)と、涙がこぼれた。



私も夫も、息子の急激な変調に、どうしてよいかわからず、ただただ不安が募るばかりでした。

家族みんなの問題集

夏休みになった頃、昔から熱心な幸福の科学の信者だった義父が、不登校に詳しい信者の方を紹介してくれました。

私たちは、さっそくその方とお会いしました。

その方は、開口一番、私と夫に対して、「無理をして息子さんを学校に行かせなくてもいいですよ」と言われたのです。

その瞬間、私は張り詰めていた心がふつと楽になった気がしました。今の学校は、

先生が感情的に生徒を怒鳴ったり、いじめが横行したりと、必ずしも子供を安心して任せられる場とは言えません。にもかかわらず、私は「学校には絶対に行かなければならない」と思いこんでいたのです。

その方は、さらに言葉を継いで言いました。

「お父さんもお母さんも、不登校は子供さんだけの問題とは思わないでください。これは、家族みんな向き合う『人生の問題集』なんですよ」

この言葉にはハッとしました。私も夫も、息子が学校に行けないという事実に焦るばかりで、大輝の心を十分に思いやっていたいかなかったことに気付いたのです。

（一番苦しいのは、学校に行きたくても行けない大輝自身。



熱心な幸福の科学の信者である、義父の信次さん。美紀代さんたちを信仰に導き、苦難のなかでも力強く勇気を持って進む大切さを伝え、家族を励まし続けた。

責めてはいけけない。大輝が元気になるように、親としてできることをしよう）

私はようやく、ありのままの息子を受け止めることができました。そして、不登校の子供を支援する幸福の科学のフリースクール「ネバー・マインド」を紹介され、さっそく息子と一緒に見学に行きました。

「ここでエネルギーを充電しよう」

「大輝くん、ここではゆっくりエネルギーを充電したらいいんだよ」

ネバー・マインドでは、スタッフの富澤さんが、すべてを包みこむような笑顔で私たち家族を迎えてくれました。親としては、一人で東京まで通わせるのは不安でしたが、夫も富澤さんの誠実な人柄に信頼を寄せ、息子は週に3回、ネバー・マインド

に通うことになりました。

ネバーでは真理の勉強の時間もあり、これまででは興味のなかった真理の書籍を真剣に読みこむ姿を目にするようになりました。日を追うにつれ、大輝の表情は明るくなり、一日の様子を何時間も語って聞かせてくれるようになりました。その楽しそうな姿に、私も力が湧いてきました。

(心の教えには「親子は合わせ鏡」という言葉があるけれど、本当にその通りだな。大輝が元気になったら私も元気になるんだ)

仏の愛に包まれて……

私も自分の心を見つめ直そうと、幸福の科学の祈願や研修を重ねました。

精舎でエル・カンターレ像の御前に座っていると、大輝の心配でいっぱいだった心

ネバーで出会った仲間は一生の法友です!

不登校を克服した長男・須山 大輝さん (高校生)

引っ越してすぐ不登校になって、学校に行っても先生がずっと怒鳴ってくるし、家にいても「家族に申し訳ない」と思い、いたたまれなかったです。あまり口には出さなかったけど、両親もすごく心配だったと思います。

当時のネバーマインドには10人くらいの学生が通っていて、みんな家族みたいに仲良くなりました。

真理の勉強もして、なかでも『不動心』を何度も読んで、「自分は仏につながっているから、何があっても大丈夫」と、心に刻みつけていました。

しばらくして、父が「北海道に戻ってみるか?」と言ってくれたときは、「がんばってやってみよう!」と勇気

が湧き、たくさんの人たちの支えで学校に戻ることができました。

もし、僕と同じように悩んでいる人がいるなら、「自分はだめだ」と思わないで、自分を信じてほしいです。応援してくれる人は必ずいるはずですよ!



▲ネバーマインドに通っていた当時の大輝さん。このとき出会った法友たちは、一生つきあえる、かけがえのない存在になった。



心配するあまり、過保護
 になっていたと振り返る
 美紀代さん。「今は、仏
 が私たち一人ひとりの魂
 の成長を信じて見守っ
 てくださいっているように、
 息子の魂の強さを信じ抜くことが愛だ
 と感じています」(美紀代さん)



が、だんだん屈いできました。そして、全
 身が温かい光に満たされるのを感じます。
 (大輝の将来が不安で、ずっと心が休ま
 らなかったけど、一度、信仰の原点に戻っ
 て、仏の視点から与えられた問題集を見つ
 め直してみよう。私たちの魂の親である仏
 は、この試練を通して、一体何を学べと言
 われているんだろう)

まるで、私の問いに答えるかのように、

研修で拝聴した御法話や真理の書籍の一節
 が心に浮かんできました。

私は、(今、仏が大きな愛の光で包んで
 くださっている)と実感しながら、自分の
 心を見つめていきました。そして、たくま
 しく成長する息子の姿を思いおこすと、反
 省の思いがこみあげてきました。

(自分の問題集から逃げずに、一生懸命
 がんばって努力し続けている大輝は、本当
 は強い魂なんだ。私が今できるのは、つら
 い目に遭わないうよう、単に危険を遠ざける
 ことじゃなくて、本来の姿——仏性を輝か
 せ始めた大輝を信じ抜くことなんだ！)

私は、夫とともに「大輝の努力に応えら
 れるよう、成長をサポートしていこう」と
 話し合いました。

そうして、ネバー・マインドに通い始め
 て半年が過ぎた頃。

人生において、**錨**に当たるのは、
「自分は仏にながっている」という、
仏の子の自覚です。
この一点を守り抜くことができるならば、
人間は人生の波風を
切り抜けていけるのです。



経典『不動心』より

「英語をしつかり勉強して、将来は外国の
子供たちに勉強を教えてあげたいんだ！」
夢を見つけた大輝の目は、再びキラキラ
と輝き始めました。

家族で仏への道歩む

息子の回復と努力を見ていた夫も、
何度も息子と話し合っていました。
「昔の友達がいる北海道なら、もう



不登校を克服した大輝さん。
高校では体操部のキャプテン
として活躍している。

一度、学校に通えるかもしれない」

夫は埼玉県での**単身赴任**を決意し、私は
子供たちと北海道へ。大輝は中学3年生か
ら、再び中学校に通い始めました。遅れて
いた勉強も努力を重ねて追いつき、みるみ
る以前の活発さを取り戻していったのです。

不登校はつらい出来事ではありません
が、母親として子供を信じ抜くことの大切
さ、そして人が持つ魂の強さを知りました。

「自分も、周りの人も、すべて仏の子。
みんな仏と一つにながっている。お互
い、可能性を信じ合って、助け合えば、解
けない問題はない」

揺るぎない信仰が持てたからこそ、私た
ち家族は、逆境も魂を輝かせる糧とするこ
とができました。これからも家族みん
なで勇気をもって、仏への道歩んで
いきたいと思えます。

家族の絆と信仰心が深まりました！

夫・須山 幸政さん (46歳・会社員)

これまでの私は「学校は絶対」と思っていたので、朝になると大輝が元気をなくしていくのを見て、「何かの間違いじゃないか」と思いました。心の中で、息子を責めてしまう気持ちもあったように思います。

しかし、子供にはそれぞれ個性があるわけで、互いに理解し合って、親として必要な教育をすることが大切だと気づきました。

私が「学校に行かなくても、堂々と外に出て、太陽の光を浴びなさい。そうして、自分をすべて肯定しなさい」という話をしたら、大輝も安心した表情を見せてくれました。

その後、息子が進学に向けて、3

カ月で1年分の勉強を取り戻したと、スタッフの富澤さんから聞いたときは、「大輝は納得しなきゃ動かないけど、納得したらすごい！」と、わが子の強さを思い知りました。

今は埼玉県と北海道で離れて暮らしていますが、目の前にいないからこそ、今まで以上にコミュニケーションをとるようになりました。これからも信仰を中心にして、互いに成長していきたいと思っています。



不登校児支援
スクール

ネバー・マインドとは？



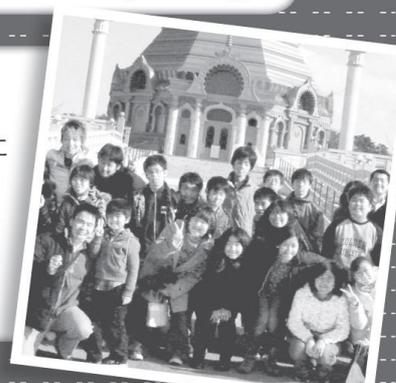
不登校の児童・生徒を支援するフリースクールです。信仰教育や学業・体力づくりのサポート、さまざまな課外授業を通して、子供たち一人ひとりにあわせたサポートを行っています。現在までに、多数の子供が再登校、進学に踏み出しています。一人で悩まずに、ぜひ一度、ご相談ください！

お問い合わせは TEL : 03-3787-6187 MAIL : nevermind@kofuku-no-kagaku.or.jp



「ネバー・マインド」スタッフ 富澤 仁博さん

不登校という、苦しい環境のなかでは、自分を責めたり、自暴自棄になってしまう場合もあります。しかし、「私は、そうした試練にある自分にも、深い愛と期待をかけてくださっている」と、心から感じられた生徒たちは、自己信頼とやる気を取り戻し、元気になっていきます。



不登校児支援スクール「ネバー・マインド」活動レポート

「気にしなくていい」が 不登校の子どもと親を救う

子どもにとっても、親にとっても大きな悩みとなる「不登校」。今回は、不登校の子どもと親を宗教の立場から支援している、幸福の科学の不登校児支援スクール「ネバー・マインド」の活動をレポートします。

87人にひとり是不登校

「このまま引きこもって、社会生活を送れなくなるのではという恐怖や不安でいっぱいでした。どう子どもを導いたらいいのか、答えを求めていました」

そう話すのは、中学3年生の息子さんが幸福の科学の不登校児支援スクール「ネバー・マインド」（以下、ネバー）に通っている大森雅子さん（仮名、49歳）。実際、大人の引きこもりにつながる場合もあるだけに、適切な対応が望まれる。

小中学校の不登校児童生徒数は、平成13年度の13万8千人をピークに減少傾向にあるものの、平成21年度も12万2千人。小中学生の87人にひとり不登校という状況だ。

ネバーが設立されたのは、そんなさなかの平成18年6月。幸福の科学グループ創始者・大川

隆法総裁の意志を受け、東京品川区戸越の幸福の科学の施設内にスクールが開設された。

ネバーに来て 成長できた息子

設立当初からネバーを担当している職員の富澤仁博さん（まきひろ）に、活動について聞いた。

「小中高校生の不登校の子どもたち向けに、戸越のスクールで週3日、勉強や遊び、体力づくりなどの活動をしています。また、4カ月に1回程度、幸

福の科学の精舎で合宿をしたり、社会科見学や自然とふれあう企画も随時行っています。保護者向けにも、定期的な保護者会のほか、個別で面談をしています。やはりニーズがあるのは個別相談ですね」

現在、ネバーの登録者は57名。子どもたちが口をそろえ

て言うのは、「ネバーは楽しい」「ここでは本音が言える」「ネバーに来て成長できた」ということ。冒頭の大森さんも息子さんの変化に驚いたひとりだ。

「3月の東日本大震災の被害を見て、『ぼくは大工になって人助けをしたい』と言ったとき、あ、変わったなと思いましたが、もともと友達思いの優しい子でしたが、人助けのために自分が努力していくという意識は持っていませんでした。ネバーに通って約1年。いまだに子どもの将来が明るく見えて、すごく楽しみです」（大森さん）

子どもたちが変わる瞬間

子どもたちはネバーで何を学び、どう変わるのだろうか。

「親や先生に言われるまでもなく、子どもたちも学校に行かなきゃいけないと思っ



▲戸越スクールの壁には、合宿のときの写真や生徒の作品などが飾られ、アットホームな雰囲気。



幸福の科学宗教教育企画局
ネバー・マインド担当

富澤仁博さん

東京国際大学商学部卒業後、幸福の科学に奉職。2006年より現職。子どもたちからは「とみさん」のニックネームで親しまれている。趣味は旅行。一男の父。

ネバー・マインド戸越スクール 時間割(火・木・土曜日)

10:00 ~ 12:00	自由交流
12:00 ~ 12:45	昼食
12:45 ~ 14:00	信仰教育(自信を取り戻すための学びや話し合い)
14:00 ~ 15:00	自分を高める時間(弱点克服をテーマにした勉強)
15:00 ~ 16:00	野外での運動&遊び(スポーツやおにごっこ)
16:00 ~ 16:30	休憩(おやつ)
16:30 ~ 18:00	自由交流
	終了
18:00 ~ 19:00	夜の部:個別学習(希望者)

※勉強に力を入れたい生徒には、他の時間にも個別対応。
※週1回、ボランティアによる合気道教室もあり(希望者)。

▲ネバー・マインドに通う条件は、「子どもが通いたい」と希望すること。親が希望しても子どもが嫌がる場合は登録できない。学校との連携にも力を入れており、多数の学校から、ネバーに出席した日数を「出席扱い」とされ、通学定期も認められている。



▲テレビゲームなどで遊ぶネバーの子どもたち。不登校の子どもは孤独を感じていることが多いので、こうして友達と遊ぶことが、立ち直るうえでとても大切な時間となる。

んです。でもそれができず、落ち込んでいます。大川隆法総裁は、『気にしないでいい(ネバー・マインド)』と言ってくださっているんですね。このネーミングに込められた思いをお話すると、子どもも親御さんもホッとしました。学校に復帰したり、勉強に取り組みようになる大きな転機は、『夢や希望を持てるようになったとき』です。不登校の子どもたちは、自分に自信がなくなると、夢や目標が壊れてしまっている状態なんです。ですから、ネバーでは信仰教育をいちばん大事にしています。『あなたは仏の子です、素晴らしい存在なんだよ。私はあなたのことを愛しています、あなたの素晴らしいところを全部知っているんだよ』という言葉を、折にふれて教えてい

るんです。私もボランティアスタッフも、その子の長所を徹底的に言葉に出して褒めるようにしています(富澤さん)

不登校は大きな問題ではない

ネバーがきっかけで変わるのには、子どもだけではない。息子さんが小学5年生のときからネバーに通っている石田弘子さん(仮名・40歳)は、「子どもの個性をつぶしてしまっていたことに気づいた」という。

「子どものために『学校に行きなさい』と言っているようで、実は『私が何か言われちゃうから行ってよ』と心の底で思っていたんです。ネバーに来てそう気づき、とても反省しました。いまは私の子として生きていくけれど、魂は立派なひとり人間で、親以上に素晴らしい個性を持った存在かもしれない

ネバー・マインド高校生座談会 前編

「学校に行く自信が持てるまで、 待ってほしい」

ネバー・マインドに通う高校生4人に、
不登校になってからの体験を語ってもらいました。
今回はその前編をお届けします。

司会（以下） 不登校になっ
たきっかけはなんですか？
A雄 小学校でも中学でもい
じめられて、でもずっと先
生にも親にも言わないでがま
んしてたんです。お母さんが
体弱だったので、オレがいじ
められてるって知ったら倒れ
ちゃうと思って。高校は、

A雄 高校2年生。小中学校で
いじめにあうが親に心配
をかけないようがまんし
ていた。高1で不登校に。

C美 高校2年生。中学校で上
下関係の厳しい部活と人
間関係のトラブルで体調
を崩し、中1で不登校に。

B子 高校1年生。中学1年の
終わりに女子グループで
いざこざがあり、いじめ
に発展して不登校に。

D郎 浪人生（19歳）。小学
生のとき教師に不信感を持
ち、中1で不登校に。両
親は幼いころ離婚。

不良に目をつけられてたか
ら遠いところに行ったんで
すが、そこもクラスが荒れ
てて、がまんが限界になっ
て高校やめました。
B子 私は学校行くたびに
「土下座しろー」とか言われ
て、行きたくなくなっちゃっ
て、C美 いじめとかはなかつた
んですけど、朝、体が動か
なくなりました。
D郎 自分は、小学校のとき
からあまり学校になじめなく
て、いじめもありました。5
年生のとき、百日咳にかかっ
て咳が止まらなくて、給食
も口に入れるたびにどしど
してしまふのに、給食を食べ
るとか、プールに入らって
先生に言われちゃって、学校
に不信感を持つようになり
ました。中学校に上がって、小
学校と同じことをくり返さな

い。そう信じていることができた
とき、不登校はそれほど大きな
問題ではないと思えてきまし
た」（石田さん）

サボっている子は ひとりもいなかった

一方で、「学校に行かないの
はサボったり逃げたりしている
からだ」という見方も根強い。
しかし、それは誤解だと富澤
さんは言う。

「子どもに学校の様子を聞く
と、『自分もその立場に置かれ
たら行けない』と、衝撃を受
ける状況ばかりです。これま
で100人以上の子どもたちと
話してきましたが、逃げたり
サボったりしている子はひとり
もいませんでした。荒れている
学校や、個性的な子を受け入
れない土壌の中で、何とかしよ
うと努力して、戦って、どう



きやいけないのかと思ったらうつ状態になっちゃって。—— 当時の気持ちや心の状態を教えてください。

A 雄 落ちるとこまでとにかく落ちたい、もう嫌だと思っりました。何も考えたくなかった。小中学校は、親を心配させたくなかったから行っていただけ。学校では殴られたり、悪口言われたりし

て、すごく嫌だったから、家ではずっとゲームやってました。アニメ見てへらへら笑ったり。当時、父と母の仲が悪かったんで、とにかくすべてが嫌でしようがなくて。

D 郎 ゲームとかやってると、ゲームのことしか考えないから、悩まないっていうのはありますね。

C 美 うちは携帯小説を見てた。読んではるときは頭の中がそれでいっぱいになるけど、やめちゃうと、嫌なことかいっぱい思い出しちゃう。学校行ってないっていうことで自分を責めちゃうし。

B 子 うちは音楽聴いたり、アニメ見て、全然つままないのに、手を叩いて笑って、自分を励ましたりしてた。—— そういう時期はどれくらい続いたんですか？

A 雄 そろそろ変わらないとって自分でも思うようになってきて、そういうときにお母さんが外に連れて行ってくれたり、ネバーのことも教えてくれたんです。落ちるところまで落ちたら、自分で「上がってこなきゃ」って思うものだと思います。親がそれを待たせてくれたんで、ぼくは助かりました。

C 美 学校行かなきゃと思うけど自信がない。その自信が持てるまで待つてほしい、みたいなところはある。

D 郎 自分は引きこもったりはしなかったんですが、ひとりの時間になると、いろいろ考え込んだりして、夜ひとりで泣いたりとか。

A 雄 めっちゃあったわ、それ。

B 子 うちもあった。
(次号へつづく)

次号では、親の接し方でよかったものや困ってしまったこと、立ち直るきっかけになったことなど、大人にはなかなかわからないエピソードをお伝えします。

Infomation

●不登校児支援スクール
ネバー・マインド
TEL 03-3787-6187
FAX 03-3787-7847
nevermind@kofuku-no-kagaku.or.jp

●ご寄附のお振込先
三菱東京 UFJ 銀行 東京営業部
(店番 321) 普通
口座番号: 0081699
名義人: シュウ) コウフクノカガク
ボランティアも募集中です。
お気軽にお問い合わせください。

にもならなくて疲れ切ってしまった。不登校は休憩の時期ではないかと思っています」

最後に、ネバー・マインドの今後の展開について聞いた。

「いずれ全国に広がっていきたいと思っています。ただ、まだ過渡期ですので、全国から参加できる1週間程度の合宿などを計画しています。また、ネバーの活動は、大川隆法総裁を始め多くの方のご寄附とボランティアで支えられています。多くの方のご協力を募りながら、活動を広げていきたいと考えています」(富澤さん)

「世間体なんて見ないで、子どもを見てほしい」

先月号では、不登校の子どもと親を、宗教の立場から支援している、幸福の科学の不登校児支援スクール「ネバー・マインド」の活動をレポートしました(※)。前回に引き続き、ネバー・マインドに通う高校生4人の座談会をお届けします。

司会(以下——) いちばん苦しかった時期に、親がしてくれて嬉しかったこと、嫌だったことは何でしたか?

(前回の内容) 不登校になった理由について各自が発表。苦しかったときは、「落ちるところまで落ちたい」という気持ちに。ゲームなどに没頭してないと嫌なことを思い出してしまふ。4人とも、夜ひとりで泣いていたことも多かった。

A雄

高校2年生。小中学校でいじめにあうが親に心配をかけないようがまんしていた。高1で不登校に。

B子

高校1年生。中学1年の終わりに女子グループでいざこざがあり、いじめに発展して不登校に。

C美

高校2年生。中学校で上下関係の厳しい部活と人間関係のトラブルで体調を崩し、中1で不登校に。

D郎

浪人生(19歳)。小学生のとき教師に不信感を持ち、中1で不登校に。両親は幼いころ離婚。

D郎 うちはお母さんも昔不登校だったので、不登校になる気持ちわかってくれて、「私はあなたのことを100%信じてるし、不登校なんていうのは休憩期間だから、ゆっくり休んでいいんだよ。何かやりたいことがあったら支援するから」って。それであとは何も言ってこなかったんですよ。だからすごく助かりました。でも、おばあちゃんが心配しちゃって……。

「B子」 うちはお父さんに、「そういうことは大人になってもあるから、今行かなかつたらやっていけねーぞ」って。でもお母さんは、「行きたい高校があつたら一緒に見学行かから」って言うてくれて、実際に

A雄 父さんと母さんが、「なんであいつが不登校になったんだ」って毎晩ケンカしてるのが苦しかったです。自分

が不登校になったせい、父

さんが怒って、母さんも苦しんでるっていうのが。

「C美」 うちはお父さんが自分と似たような病気(起立性調節障害)だったので、「いいよ、

父さんと母さんが
毎晩ケンカしてるのが
つらかった。

私が「この高校見学してみたい」って言った

ら、資料を集めてきて、一緒に行ってくれた。それはけっこううれしかったです。

——気持ちが変わってきたときのことを聞かせてください。



D郎 ぼくはお父さんがいない、お手本がなかったとい
うか、「お手本がないから自分はダメだ」って思ってた。だけど、お母さんから幸福の科学のことを聞いて、自分も大川先生の本を読んだりお話を聞くうちに、先生を尊敬できるようになってきたんです。それで、「お父さんがいなくても

自分が迷惑かけてるんじゃないかって思ってた。

たんです。むしろ尊敬できない父親よりもいいんじゃないかって思ったら、父親がい

ないことがそんなに悪いことじゃないって思えてきて。

A雄 小中学校でいじめられたから、学校では居場所がなくて、人と話すのが怖かった。でも、ネバー（ネバー・マインドの略称）に見学に来たら、すごいアットホームな雰囲気で、一目で、「あ、ここオレの居場所になるかも」って思ってたんです。

ネバーに通い出してからは、「青春がかえってきた！」みたいな感じでした。最初は友達とい

存在ができたから、すごくうれしくて。ネバーの信仰教育とか、合宿に参加したりするうちにだんだん変わってきて、いつのまにか人の悩みの相談に乗ることが多くなってたんです。で、友達から、「君と話すのが元気になる」とか、「カウンセラーが向いてるんじゃない？」って言われて。うれしかったし、自分でも、いいかもなって思って、「カウンセラーになる」という夢が見つかったんです。そしたらガラツと変わって、世界がすごく明るくなった。ぼく見た目

も変わったんですよ。前は前髪デロンデロンに長かったんですけどスツパリ切って。すべてを前向きに考えられるようになった。

B子 うちの学校は、新学期が始まって1カ月間頑張ると、ディズニールランドに行けるので、それまで頑張ろうと思っ

たんです。そしたら友達できて楽しくなって、今も学校行ってます。定時制だからヤンキーとかもいて怖かったんですけど、友達になってみると中身はすごい優しい子で、おもしろーいって思いました。

C美 うちも、不登校になる前より人のいいところが見えるようになった。なんか、人が好きになった。——人を好きになったきつ

「カウンセラーになる」っていう夢が見つかったんです。

けはどんなことでしたか？
C美 ネバーに来たらみんな変わってて……。
D郎 みんな変わりモン（一同笑）。世間の常識が通じない。

C美 始めビックリしたもん。

B子 なんかさ、「私って普通かも」って思った。

A雄 ネバーに来る前は、こういうのオレだけなのかなと思ってた。

C美 ネバーに来てる人は、つらい経験をしてきているから、人の気持ちがわかる人が多くて。それまでの友達って、楽しくてつるんでたんですけど、裏切りも普通にあつたし、ケンカしても仲直りしないし……。最初は、信仰って言うれてもどうでもいいっていうか、大川先生の写真が家に飾られてるのを見て、不思議に思っていただけ

だったんですけど、「信じる」って

てことがわかるようになってから、だんだん心にあつ

たかいものが入ってきて、「ここにいたい」って思うようになってきた。「自分も愛された」って思えたというか。そ

したらもっと人を好きになり

たいって思えるようになって。――読者のみなさんに伝えて

おきたいことはありますか？

A雄 子どもが親に反発することもあると思うんですけど、絶対、子どもは親のことを心配してるんで。ぼくも自分が

いじめられてることを母さんが知ったら、倒れちゃうと思っ

てがまんしてたから。だから

やっぱ、あたたかく見守ってほしいです。世間体なんて見

ないで子どもを見てほしい。信じてほしい。それだけで子

どもはすごくうれいいですね。

C美 子どもはけっこう親

でわかるよね。

B子 隣の部屋に避難しなきゃ！とか（一同笑）。

A雄 ぼく以外でも、不登校の子を持つ親って、父親と母

親が仲悪かったりするんですよ。だから、ちゃんと対話し

てほしい。うちも相変わらず仲悪いし。でもまあ、少しは

よくなってきましたけど。

B子 ある意味、不登校って、家族の絆が深まるってある

じゃん。

C美 あるある。

B子 だから、不登校って、いいのかな、みたいな。前

までは、お母さんとお父さん

がケンカばかりしてたけど、

不登校になってからいろいろ

考えるようになって、優しく

なったし。



C美 うちも。なんか、かく

れてた家族の問題が出てくる

みたいな（笑）。

B子 世間的に見て、「不登校

イコール挫折」なら、早いう

ちに挫折を味わったから、も

う何があっても自分は負けな

いってという気がする。

信じてほしい、 それだけで子どもはうれい。

のこを見てる。お母さんが

D郎 親が機嫌悪いか一瞬

がケンカばかりしてたけど、

不登校になってからいろいろ

――今日は赤裸々に語って

ただき、とても参考になりました。

まずは、以下のアドレスからメール登録を！

(行事のご案内を送らせていただきます)

<http://hs-nevermind.org/mail/mailmember/>

【連絡先】

宗教教育企画局 ネバー・マインド

(担当：富澤・森田・木全)

〒142-0041 東京都品川区戸越 1-8-2

nevermind@happy-science.jp

電話 03-3787-6187

FAX 03-3787-7847

お気軽にお問い合わせください。